

---

# 夜に咲く華

瑞雨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜に咲く華

### 【Nコード】

N7890P

### 【作者名】

瑞雨

### 【あらすじ】

夜にしか咲かない花がある。真つ暗闇にだけ咲く魅惑の花。暗ければ暗いほど美しく扇情的にそして華やかに色香漂う。それは人を喰らう花。時に牡丹のように、時に水仙のように、それは見目形を変え人を魅了する。そんな華に魅せられて今宵もまたひとりの哀れな雄が光を求めやって来る。

短編『夜に咲く華』を連載として掲載しています。

遊女の話です。苦手な方はご注意ください。

## 第1話（前書き）

短編『夜に咲く華』を連載として掲載するにあたって、短編の方の話を第1話として掲載しています。

遊女の話ですので苦手な方はご注意ください。

## 第1話

夜にしか咲かない花がある。真つ暗闇にだけ咲く魅惑の花。暗ければ暗いほど美しく扇情的にそして華やかに色香漂う。それは人を喰らう花。時に牡丹のように、時に水仙のように、それは見目形を変え人を魅了する。そんな華に魅せられて今宵もまたひとりの哀れな雄が光を求めやって来る。

「旦那、」

「おお、こつちに。早よう、近う来ておくれ」

遊女は目を細めて妖艶な笑みを浮かべた。ちらりちらりと見える着物の前を押さえる手はいつそ病的なほどに白く、美しい。華やかな衣装とは対照的に襟から伸びる首は白く無垢である。そして真つ赤な唇は艶やかに光る。早く早くと急かす男を遊んでいるかのように、一歩踏み出しては休み、また一歩踏み出しては休をとる。ゆるりとした動作の度になる衣擦れの音さえ男をひどく興奮させた。

ふわりと薫りが男の鼻に直接刺激をあたえるころには男と遊女の間には簪一本ほどの距離しかない。

「だんな、」

耳元で息を吐くように囁く声は男の体の髓まで痺れさせ男の中の獣を呼び起こす。目を細め、はぁ、と真つ赤な唇を濡らしながら濃密

な息を吐くと男の喉がゴクリと上下に動いた。

「だんな…、」

するりと白い手を差し出すと男はゴツゴツとした浅黒い手で力強く掴み、酒の臭いが漂う息を吐いた。遊女は嫌悪感を体の奥底に隠し、うつとりとした表情を貼り付ける。黄ばんだ歯と分厚くかさついた唇。脂でギトつく醜い頬。何をとってもおぞましいその見目形。思わず鳥肌が立ちそうになる体を小さく震わせれば男はなにを勘違いしたのか、

「そうか、そうか、かわゆいのお」

と、遊女のか細い体を力強く抱きしめる。胸がつまりそうなほど抱き締められれば息が出来なくなる。そと男の胸元を押せば男は満足そうにその下世話な笑みを浮かべ、遊女を組み敷いた。遊女は冷めた瞳を天井に向け、小さく囁いた。

『さあ、地獄の始まり始まり』

「ん？なにと言ったか？」

遊女の体に夢中になる男に遊女の囁きは届かなかった。

「いいえ、何にもありません。さあ、旦那、早ようあちきを……、」

頭を横にずらし小首を傾げて甘い声を漏らせば、それが合図かのようには遊女の細い鎖骨に噛みつくように顔を埋めた。荒々しく己の軀を貪る男はもはや何も頭にはない。理性などという言葉など初めから無かったかのようにただ本能のまま荒く濁った息を吐く。そんな男とは裏腹に遊女は自分の体と頭がひどく冷めていることに安堵した。熱く燃えたぎる眼は獣そのもの。ただこの浅ましく愚かな男の欲望を満たすためだけの自分の存在。なにも考えなくてよい。ただ悦びに頬を染め、瞳を潤ませ、軀を反らせるだけでいい。いや、そう見せるだけ。魅せる演技を。まだ私は穢れてはいない。まだ物の怪にとり憑かれてはいない。冷静な頭さえあれば大丈夫。あの愚かな同志のように抱かれることを悦んではいない。

ああ、わっちはまだ大丈夫……

顔を歪ませたくなるほどの荒い息と雄の二オイ。

ああ、おぞましい。この男が己の軀を、その情けない体で撫で回すなんて。ああ、吐き気がする。

「…だ、んな……、」

こうしてたまに声を出す。はっきりと発音するのではない。漏らすのだ。息だけで掠れる声を出せば男は悦ぶ。声を抑えて、抑えて、我慢できずに漏れた小さな囁きが男をさらに助長する。

なんて愚かな醜い生物。自我をなくし己の軀を食い尽くす雄たちを何度絞め殺そうかと思ったことか。太く短いその首を、この手で締め尽くせば、この男はなんと鳴いてくれるだろうか。醜い醜い蛙の潰れたようなそんな声にもならぬ悲鳴をあげてくれるだろうか。

遊女はパタリと投げ出していた手を自分を覆う男の首にゆっくりと近づけた。男は気づかない。

（ああ、なんて醜い顔、）

（ああ、なんて醜い軀、）

（ああ、なんて醜い生き物、）

そおつと伸ばした指先が男の首に触れるか触れないかの距離になった瞬間、遊女は突然意識を取り戻したかのようにハツとした。そして、男の体液の飛ぶ額を見て遊女はその冷たい手を伸ばすのをやめた。自ら雄に触れようだなんて……、考えただけでもゾツとする。

（ああ、怖ろしや。危つく穢れるところで、ありんした……、）

いつまでたつても冷たいままの軀を必死に喰らう男に冷笑を浮かべれば、男は嬉しそうにまた荒々しい息と共に汚れない胸元に喰らいつく。

ああ、なんと愚かな雄どもよ。ここにいるは人喰い花。美しい見目で餌をおびき寄せる。美しく着飾ったその姿、濃密な薫りを酔わせ

れば、男はふらりと吸いつく。細めた眼には誘いを、薄く開いた赤い唇には誘惑を、白い首は惑わしを、細い肩には艶麗を。体の全てが媚薬。一度吸えば逃れることはできない、怖ろしい麻薬。脳髓まで満たす雌の薰り。

さあ、もっと。もっとその醜い姿を晒しておくれ。お前たちが醜くなればなるほどわっちは生きていられる。こんな意味のない世界で己だけが正常だと思える。

なにより異常なのは自分なのに。

さあ、早く満たすがよい。お前たちのその愚かしい欲望を。さあ、早く喰らえばよい。美しく咲いた花に潜む毒汁を。

『ふふ、旦那、もっと、やさしく……………』

お前たちはもう、逃れられない。



## 第2話

夜にしか咲かない花がある。真つ暗闇にだけ咲く魅惑の花。暗ければ暗いほど美しく扇情的にそして華やかに色香漂う。それは人を喰らう花。時に牡丹のように、時に水仙のように、それは見目形を変え人を魅了する。そんな華に魅せられて今宵もまたひとりの哀れな雄が光を求めやって来る。

ちらりと赤い舌を出し、それを良く熟れた林檎のような唇に這わす。時折見える白い歯がより遊女をなまめかしく魅せる。

「旦那、」

「あ、そ、その、」

旦那と呼ばれた男はまだ若い。十代後半から二十代前半ころであるうか、美しい遊女を目の前にただただ狼狽えるばかりである。女遊びなどしたことのない若造。大きな黒眼に愛嬌があり、遊女が一動作行っただけでいちいち頬を染める、そんな純粋な心の青年。

「いかが、なさいしんす、」

はつきりしない青年に遊女は助け舟を出す。

時折いるのだ。いままでろくに女というものに触れたことのない『幼い』男が上司やら友人やらに無理に連れられて、『男になれ』と荒い療法をくだされる。それが吉と出るか凶と出るかは遊女次第。

男に興味をもてば持てる技術を駆使して『男』にするが、興味をもてなければ災難。金をとるだけ取ってろくに話もしないうちに時間がきて帰される。さてこの青年はどちらであろうか。

「あ、あの……わ、私、こういう所は初めてで、その、……すみません……」

首までを赤い果実のように染め上げ、回らない口を必死で動かす青年に思わず笑みがこぼれた。そんな遊女の様子に青年はポカンと口を広げて顎を落とす。その間抜けな顔に遊女はしまったと眼を細めるが緩んだ口元は戻らない。

「あちきとしたことが……」

滅多なことでは笑わない。それが自分の『売り』だったはず。にもかかわらず、こんな青年に簡単に笑みを見せるなんて。

笑うこと、すなわちそれは心を開くこと。何度も通う旦那や番頭にすら笑い顔など見せないというのに、会って間もないこの青年にはなぜか自然と笑みがこみ上げた。興味をもったということか。

ふふ、……なるほど面白い。ならばこの青年で遊ぶのも悪くはない。この何も知らない『初』な青年を己の手で開拓してみせようか。この青年が獣へとなり果てた時、それは勝利を意味する。

「だんな、」

ふうつと青年の耳に温かい息を吹きかける。遊女の白く細長い指が青年の頬に触れた。まるで壊れ物を扱うかのようにそっと乗せた指

は青年の輪郭に合わせてス・ツと撫でる。冷たい指は顎までくると、下唇に添わせてゆつくりと動く。微かに震える唇から血液が流れるのを感じた。トクトクと音をたてる青年の唇の上方をゆつくりと時間をかけてなぞる。青年は最早自我の効かない人形のような手をゆつくりと、慎重に、そして、丁寧に遊女の背へと添えた。青年の操られたかのような手が白く柔らかな遊女の背に触れた時には、遊女の背はすでに外気に触れていた。遊女の小さく冷たい手が青年に添えられる度に、青年の体がびくりとはねる。

しかし、遊女の背も肢体も、すべてがささるように冷たいのに、時折もらす息だけは温かかった。それだけが遊女が『生きている』と感じられた。まるで人形のように美しく造られたその肉体と、描いたかのように愛すべきその顔は、時たま遊女をこの世から切り離しているかのようにだった。

「ふ、ふふ、」

ぎこちなく動く若き男に遊女は思わず笑いをもらした。楽しそうに笑う遊女に手を掴まれ、そのまま遊女の顔へとあてがわれた。少しかすれた真つ赤な唇は艶々と光り、ニイっと弧を描く。黒く長い遊女の睫が触れそうなほど顔を近づけると、遊女は青年の瞳をぺろりと舐めた。その奇妙な感覚に青年はきゅっと瞼を強く閉じる。青年の一挙一動にくすぐすと笑みを浮かべ、青年の瞼、鼻、耳朵と順番に舐め上げる。

「ねえ、だんな、」

とろけそうなほど甘い声を耳元で囁く。青年がそろりと瞼を押し上げると、遊女の赤い舌が見えた。

「あちきをみて……？」

そう言ってまたペロリと瞳を舐めた。

「あ、あ、……あ、」

狼狽える男の真っ赤に染め上げた首筋に顔を埋めて、クスクスと唇を震わせた。

『ほら、楽しい楽しい時のはじまり……。』

灯りが消えた。

### 第3話

夜にしか咲かない花がある。真つ暗闇にだけ咲く魅惑の花。暗ければ暗いほど美しく扇情的にそして華やかに色香漂う。それは人を喰らう花。時に牡丹のように、時に水仙のように、それは見目形を変え人を魅了する。そんな華に魅せられて今宵もまたひとりの哀れな雄が光を求めやって来る。

「なんて美しい……」

男が呟く。色が白く背が高い。鼻筋がすーっと通っていて目は三白眼。薄い唇が男を魅力的にみせる。きりりとした眉が美しい。男はその三白眼を薄く開き、唇を弓なりに上げ囁いた。

「ああ、美しい。あなたは美しい……」

「あきちなんて、…まだまだなんし、」

遊女はいかにも照れているかのような表情を作り顔を背けた。頬を薔薇色に染め、短く書いた眉を八の字に下げる。唇は嬉しさを隠せない、困ったかのような複雑な形をつくる。そして最後に長く持った袖を顔に当て、

「、恥ずかしい……、」

と囁く。戸惑いと嬉しさを交えたほのかに甘い蜜のような声色。そ

うすれば男は更に笑みを深めて、いい気になる。

「ふふ、愛らしいですね。ええ、とても、愛らしい」

すべては遊女の手の内。言わせたい言葉を言わせる、金子を使わず、それができての遊女。男が刻む胸焼けするような甘い言葉も全ては遊女の手引きの元。

「ああ、なんと美しいのでしょう」

うつとりとした光悦の表情を貼り付け、同じことを繰り返す男に遊女はすっかりと興ざめた。町娘に人気のあるというその唇は同じことしか口に出来ないのだろうか。美しいと言えば女が喜ぶとでも思っているのだろうか。そう思っているならばいますぐその考えを取り払うべきであろう。生憎遊女は美しいと言う言葉に靡くほど甘いものではない。

なぜなら遊女が美しいなど当たり前のこと。当たり前のことを当たり前に口にして堕ちるなど、

……有り得ない。馬鹿馬鹿しいにもほどがある。遊女は顔を歪ませるも、すぐに頬を染め幸せそうに微笑んだ。

「嬉しい……、」

「ああ、美しいあなたは、私のもの」

男のその台詞に遊女は一変してその美しい顔を能面のように冷たい

表情にした。ひんやりとした体が更に冷える。気乗りでなくとも少しはこのやり取りを愉しんでいた。なのに……、男のこの一言ですっかりと冷え切ってしまった。

誰がお前のものだって？あちきはあちきのもの。誰のものにもなりません。いくら金子を積もうと、甘言葉を囁こうと、あちきは誰のものにもならぬ。遊女は夢を与えし者。躰はやっても心はやらぬ。お前にやるものなど何一つ、ありません。

「ほら、愛らしい顔を見せておくれ」

男は顔を隠す遊女の手を掴んだ。遊女の首筋から薫る薫き物の匂いに男はその端正な顔を緩ませる。

（男という生き物は、どこまでも愚かで目出度いものよ）

遊女はふん、と鼻で笑うと、深紅の唇を薄く開いた。

『わっちはわっちのもの、おまえには、やらぬ、』

「え、」

聞き取れるか聞き取れないかほどの小さなささやきに男は体を固くして遊女の手首を掴む力を緩めた。隠すもののなくなった遊女の顔

は先ほどとは違って無に近かった。男にやる射差すかのような冷たい視線に男はたじろぐ。視線だけで殺せそうな、そんな恐ろしさを纏った瞳。

この男は何も満たしてはくれない。同じことを繰り返す己だけが満足して帰っていく。同じ台詞、同じ愛撫、同じ息遣い。

ああ、息がつまる。いくら見目が良くとも脳が足りなければ詰まらぬ男。

だが、今この瞬間に見せる男の間抜けな面はわっちを愉ませてくれる。

ふふ、

「おや、どうなさったでありますか、」

目を開いたまま固まる男に遊女は遠慮なくクスクスと笑い声をたてて口元を袖で隠した。その様子は先ほどとは打って変わって、男の知る『愛らしい遊女』の姿。先の恐ろしい女は一体誰であったのか。夢でも見ていたのだろうか…。

「い、いえなんでもありません」

慌てたように体面を取り繕う男に遊女は冷笑を底に秘めながらも、優しく愛らしい、庇護したくなるような笑みを浮かべ、男の白く綺麗な細長い指を手を取った。

さあ、その足りない脳で、

『あちきを愉しませて…？』

### 第3話（後書き）

遊女の一人称が『わっち』と『あちき』とこころこころ変わっています  
が、理由あつてのことなのでご理解下さい。

## 第4話

夜にしか咲かない花がある。真つ暗闇にだけ咲く魅惑の花。暗ければ暗いほど美しく扇情的にそして華やかに色香漂う。それは人を喰らう花。時に牡丹のように、時に水仙のように、それは見目形を変え人を魅了する。そんな華に魅せられて今宵もまたひとりの哀れな雄が光を求めやって来る。

蠟の灯りだけが煌々と灯り、互いの姿がほんのりと橙色に見えるだけの帳の中。静かに酒をつぐ遊女の手元を微笑みながら見つめる男の視線は厭らしいものではなく、柔らかく遊女を包み込む。

トクトクと注がれた白い濁り酒を男に手渡す。男の手を包み込むかのようにそつと手を添わせればどんな男もだらしなく口を緩ませる。

しかし今日の客は違った。色香を漂わす遊女をただの少女を見るかのような慈しんだ目で見る。自分の手に添われた遊女の手を片方の空いた手でそつと外すと、小さな猪口を傾けて酒をちびりと喉に流した。

遊女はこの奇妙な男を怪訝に思うも、自分の周りに流れる穏やかな空気を心地よくも思った。

「どうして君たちはこんなことをしているんだい？」

男が口を開いた。

質問の意図が分からない。こんなこと、とは遊女としての仕事のことでだろうか。もしそうだとしても、なぜそれをこの男が聞くのだ。

この廊の中で。

自分を買った男が。

「理由は人それぞれありんすよ。でも一つ言えることは、親に売られたと言っこと」

食い扶持を減らすために娘を売るのは常のこと。別段とりわけ珍しいことでもない。

「こんなことを、してはいけないよ」

こんなこととは？身体を売ること？

「自分を大切にしないと」

男は至極穏やかに笑った。咎めるわけでもなく、ただ微笑みながら淡々と言葉にした。

「ふ、それを旦那が言うのでありんすか、」

「ははは、そうだね」

自分を買った男が、身体を大切にしろと？可笑しなことを言う。気でもふれているのではないか。それとも気を引くための甘い言葉のつもりなのか。

どちらにせよ、

可笑しなオトコ…。

「わっちは……」

遊女はなにかを言葉にしようとしてやめた。長い睫毛で縁取られた  
瞼を伏せると、赤く光る唇を薄く開いた。

「旦那みたいなお人がいるから、遊女がいるのでありんす、」

遊女を抱きにくる男がいるから遊女がいる。ただそれだけのこと。

「……そうだね」

男は小さく笑うと、白く濁った酒を口に含んだ。

女を求める男がいるから遊廓があるのか、身体を売る女がいるからそれを買う男がいるのか。

堂々巡りの水掛け論。そんなこと遊女にとってはどうでもよかった。

どちらにしろ自分は今ここにいて、男を相手に金子を稼ぎ、一刻も早くこんな地獄から出たいと願っているのだから。自分ほどこんなにもこの仕事を馬鹿にし、やる気のないものなどいないだろう。

ここら出るには働かなくてはいけない。誰よりも何よりも巧く働かなくてはいけない。

なんと皮肉なものよ。

これを楽しんでやっているものには男は寄らず、辞めたくないのに客が来ないからまんまが食えなくなつて死んで逝く。

早くやめたいと願っているながらも男に触れることすら嫌悪を抱くものには、男が間も空かずにやってくる。

なのに、こんなに客をとつても一向に金子は返せない。いくら働こうと年明きになった者など数えるほどしか見たことがない。遊女の終わりは二十八まで。二十八になれば暇を出される。けれど、それまでの十年の間、粗末な飯で馬車馬のように働かされ、梅毒<sup>かさ</sup>になり、生きたまま投げ込み寺に捨てられて、誰にも看取られることのないまま死んで逝く。

それが嫌なら借金を返すしかない。けれど、借金を返して、堂々と

この大門を出た物などいた試しがない。

かといって身請けするにもそれを易々とできる旦那など一生に一度巡り合えるかどうか。

身代金に加え、これから働いて稼ぐであろう金額、これまでの借金、見世や周囲の人間に出す祝い金……合計何百両にもなる大金を、数えるのも億劫なほどの男に躰を売ってきた女郎に、一体どのだれが払うというのだ。

ああ、一生この醜い虫籠のなかで生きていくのだろうか。

鈴虫のように見せ物にされ、啼かなくなったら捨てられる。

こんな光のあたらない場所で自分は死んでいくのだろうか。

なんて、

なんて……、

なんて惨めで憐れな蟲よ。

「旦那がいるからわっちはいるのでありんすよ、」

「……はは、そうだな」

男は優しく笑いながらも可哀想なものを見るような、哀れむような、

そんな目で遊女を見る。

そんな目で見るな

お前には分からぬ

男のお前には

「こんなところ、」

遊女は結んだ口を更に固く結ぶかのように力を込めた。

「……出れるものならとっくに出ている」

縄をつけられ、

足枷をつけられ、

首に鎖をつけられ、

小さな小さな檻に容れられた蟲。

決して逃れることなどできない。

男には分からぬ。

男はいつだって女を閉じ込める獣でしかない。

「出してあげようか」

男は何とでもないかのように笑いながら言った。

「ここから出してあげよう。君が望むのならば」

遊女の持つ徳利をそつと自分の手に持ち、左手に持った猪口に注いだ。男の言葉が真なのか偽なのか。遊女には分からない。

「それは旦那の、」

遊女はわけもなく震える指を左手で押さえた。

「旦那が、…わっちを身請けするということ、ありんす、か」

ここを出られる…？

ただこの若い男に自分を身請けするほどの金子があるとは思えない。

「お金なら心配ないよ?」

まるで心を読んだかのような台詞に遊女の頬はカツとなった。赤い口をぎゅっと噛み締めると、男は遊女の口をそつと指で緩ませた。そして、指を遊女の口に乗せたまま穏やかに笑った。

「君が望むのならば今すぐにでも出してあげよう」

「旦那の、」

奥方になるということ。そんなことが自分にできるのだろうか。幼いころから廓に漬かって生きてきた己が、普通の生活などできるとは思えない。

「別に僕の妻になってほしいわけじゃないよ」

「……え?」

「僕は君をここから出してあげるだけ。ここを出た君がどう生きようと君の自由だ。好きに生きたい。もちろん僕の妻になってくれるのならそれはそれで僕は嬉しいけどね」

至極淡々と話しながらも男は笑みを崩さない。真意が分からない。自分のものにならない女のために金を出す?そんなことあり得ない。

どうする、

どうしたらいい、

どうするべきなのか…、

「旦那は、…旦那はわっちを愛してくれますか…、」

こんなことに意味などないのに。愛など関係ない。利用すればいい。出られるのだ。このおぞましい虫籠から出るのだ。なのに、

「君が望むのならば、僕は君を最愛の人として生涯大切にすると誓うよ」

なのに、

こんなにも滑稽な、虚偽の言葉に騙されることを望んでいる。

惚れた、腫れたは御法度。

そんなのは分かっている。

けれど、自分は男に躰を、偽りの心を与えているのだから、その代償に束の間の夢をもらってもいいではないか。

勝手に背負わされた借金のせいで、せっかく売った躰の金も、すべて<sup>むし</sup>糞りとられてしまうのだから。結局手元には何も残らないのだから。

だったら、

すぐに消えてしまう夢くらい、

手にしたっていいではないか。

「ふふ、…ふふふ、」

目から落ちたのは涙か、それとも……

小さな夢か。

「だんなが、…旦那がおかしな、こと口にする、から、わっちまで…  
…っ、変になったで、あり、んす…っ」

ぼたりと落ちた涙を手で掬うも、次々と落ちる涙は遊女の小さな手では拭いきれない。ぼたぼたと切れ目なく流れる涙は容赦なく頬をつたい、白粉を消してしまう。可笑しいのは馬鹿なことを言う男なのか。それともそんな男の言葉に涙する自分なのか。

結局夢は夢でしかなくて、

「そんなこと、聞いた、ら、わっちはここでは生きてはいけなくて  
ござんしょ、う……、」

叶うはずのない夢に涙して、

「けんど、」

嘘でもいい、

「もう、言わないでおくなんし」

例え嘘でも、

「わっちは、」

ほんの少しでも、

「小指を差し出す気などありません、」

虫籠こもから出るという夢を見られた。

「さあ、旦那、」

束の間の夢を見せましょう。

ここは廓。夢を与える籠の中。あちきは女でお前さんは男。

狂おしく光悦な狂気の夢を与えましょう。

#### 第4話（後書き）

梅毒はこの当時は『かさ』と言われて、一回なって、治ったらもう二度とならなと言われ（もちろん虚偽です）、しかも妊娠病気が潜伏している影響か、妊娠しにくい身体になっているから、見世としてはとても重宝されていました。こうして梅毒はどんどん広がっていき、客の方でも、梅毒にかかることは一種のステータスだったそうです。

## 第5話（前書き）

今回は今までの4話よりも少し長めで傾向が違います。

会話がほとんどなく、もしかしたら読みにくいかもかもしれませんが、  
自分的には気に入っている話なので読んでいただけると嬉しいです。

## 第5話

夜にしか咲かない花がある。真つ暗闇にだけ咲く魅惑の花。暗ければ暗いほど美しく扇情的にそして華やかに色香漂う。それは人を喰らう花。時に牡丹のように、時に水仙のように、それは見目形を変え人を魅了する。そんな華に魅せられて今宵もまたひとりの哀れな雄が光を求めやって来る。

「どうした」

閨があげ、上等の羽織を肩にかけた旦那は、どこかぼおとした遊女に声をかけた。  
男に尋ねられた遊女は目を細め、どこか遠くを見、玉虫色に染まつた唇を動かした。

「懐かしい夢を、見んした……」

昔、初めてここに来た時の夢を……

まだ十だったわっちは、見も知らぬ男に手を引かれ、廓にやってきた。

その時のわっちは阿呆だったから、きらきらと輝くこの遊郭に心を躍らせた。見たこともない華やかな着物に身をつつみ、真つ赤な紅をつけた『姐さん<sup>ねえ</sup>』方はほんに綺麗で、天女でも見ているのではな

いかと勘違いを起こしたほどだった。目の覚めるような紅や蒼や金の帯を垂らした姿はまるで金魚のようで、ひらひらと尻尾を揺らして歩く姿に目を奪われた。

まるで桃源郷のようなここで、きれいな姐さん方の世話をすれば白い飯が食えると聞いて、自分が天女の遣いになったかのような錯覚を起こしたのだった。

姐さん方の男を惑わす姿は孔雀のように艶やかで、伽羅きやろのほんのりとしたかおりが鼻をかすめる度に自分もこんな風になれるのだと、嬉しくて堪らなかった。

桃源郷に来てしばらく経ったある日、床についていたとき急に恋しさを募らせたわっちは姐さんを探した。いつも傍にいてくれる姐さんは夜だけは傍にいてくれなかったから一人で過ごす夜を余計に寂しく思った。なぜ夜は傍にいてくれないのか不思議に思いながらもそれは聞いてはいけないうと、そう思った。けれどもどうしてもその日は一人では過ごせなかった。

だから姐さんの部屋に向かった。

姐さんを一目見れば安心してまた床につけると思った。

姐さんの部屋についた時、まだ明りがついていないことにほっとしたわっちは襖を開けようとしたが、中はしんと静まり返っていたから、姐さんが明りをつけたまま寝ていると思った。

大好きな姐さんには少しでも休んでほしかったから、もしも本当に

寝ているのならば、声はかけずに姐さんの影だけでも見て部屋に戻ろうと思っていた。だから姐さんを起こさないようにそおつと襖を開けた。

するとむわつとした空気が顔をかすめた。

汗のにおいと生臭いにおいが鼻をツンと刺激し、息をするのも苦しいと感じた。

姐さんが死んでいるのではないかと、妙に怖くなったわっちは姐さんと呼ぶために声を出そうとしたが、出すことができなかった。

そこにいたのは姐さんであつて姐さんでなかった。

いつも綺麗に着こなしている姐さんの着物がぐちゃぐちゃに着崩れ、今朝方、綺麗に結った髪はまるで妖かと思えるくらいひどく乱れている。そしてその姐さんを醜く太った男が押しつぶしている姿はまるで豚のようで吐き気がした。荒々しい息が姐さんに降りかかる度に醜い雄を殺めたい気持ちになった。綺麗な姐さんを、わっちの姐さんを汚す雄をこの小さな手で引き裂いてしまいたかった。

そう思つた瞬間、わっちは自分の頭にささる簪を手にとつていた。そして自分の体が滑り込めるくらい襖をそつと開け、醜く揺らめく脂肪を刺す己の姿を想像した。ぎらぎらとぎとついた浅黒い肉に紅い玉のついた簪がささる、人とも豚ともとれないような声を發して畳を転がる家畜、そう考えるだけで楽しくて仕方がなかった。姐さんをあの雄から助ける、その思いだけで息を殺した。

するとわっちに気づいた姐さんは、わっちに目をやったまま自分の下腹にくらいつく男の頭を押さえ、わっちに向かってニイっと笑った。

玉虫色に染まった唇が自分に笑いかけた時、嬉しさと恐ろしさがわっちの背筋をかけのぼった。

玉虫色の紅をつける姐さんはとても妖艶で美しかった。けれど姐さんは玉虫色がこの世で一番嫌いだった。玉虫は殺めたいほどにとても醜いから。だからわっちは姐さんがその醜い雄を殺めたいほどに嫌っているということを悟って、ほんに嬉しかった。

その時の姐さんとわっちはまるで一つの生き物になったかのようにだった。

姐さんはわっちの眼をまるで捕食者のように捕え続けた。

そして男の頭を押さえたまま、白く細い人差し指をそっと自分の唇に寄せて微笑んだ。だからわっちも玉簪を汗の残る手に握りしめたまま姐さんに笑った。

姐さんとわっちがそんな秘密のやり取りをしているなど全く気が付いていない男は荒い鼻息を吐きながら姐さんの臍を撫でまわした。無遠慮に姐さんの臍に手をやる男は腹立たしかったが、姐さんはわっちに向かっていつもの優しい笑みを向けていたから、男を殺そうなどという思いはもう抱いてはいなかった。

わっちは男が姉さんに何をしているのかが分からなかったけれど、とても醜く、おぞましい行為を行っていることは分かったからそのまま姉さんと男を見続けた。

あんなにも恐ろしくて、どす黒くて、醜い大きな『モノ』が姐さんの  
の躰を貫くのはほんに悔しく、吐き気がした。

男が獣のように唸り声をあげ、姐さんの躰の上を激しく動く様子を  
わっちが見るのを姐さんは咎めはしなかったし、むしろ舞台でも見  
せているかのようにわっちのために艶やかに動きつづけた。

そんな姐さんはこの世の何よりも美しかった。

男が帰ったあと、わっちは姉さんの傍を離れなかった。そんなわっ  
ちに姐さんはすべてを教えてくれた。躰を売り、身を削って生きて  
いくしか道がないということ。

そこで初めてわっちは自分が親に売られたということに気がついた。  
今の今までそんなことに気がつかなかった自分はなんて馬鹿だろう  
と、自分で自分を罵りたくもなったが、ただ純粹にわっちが親に売  
られたことに気付かせなかった姐さんに対して尊敬の念を抱いたの  
も本当だ。

あの日、自分を『桃源郷』に連れてきた見も知らぬ男は女衞じへいだとい  
うことを知った。

親に対して特別な感情を抱いているわけではなかったが、それでも  
心がきゅっとしまる思いがした。

ああ、自分は金で買われたのかと。

はした金を手に喜ぶ親の顔が浮かんだ。自分たちが生きるために娘

を売るのはなんら珍しいことではなかったけれど、それでも自分が金で取引されたと分かった途端、反吐がでた。けれど、そのおかげで姐さんに会えたから良かったともいえるかもしれない。

これから先、同じように金で自分を売らなければならないと思うといささか奇妙な気持ちが出た。

そんなわつちを姐さんは抱きしめて、廓で生きていくための方法を教えてくれた。

姐さんは温かく、柔らかく、とても良い匂いがした。

それからというものの、わつちは姐さんが男に買われる姿をあの日のように、襖の隙間から見続けた。

ああ、姐さんが男に買われるという表現は間違っているから訂正しなければいけない。

『姐さん』が男を『買って』いるのだ。

金子を払うのは男だからその表現は違ふと皆は言うかもしれないが、それでもわつちにとつては間違いなく姐さんが男を買っていた。

姐さんはすべての技をわつちに教えてくれた。決して言葉では説明はしてくれなかったけれど、姐さんが男の躰の下で喘ぎ、動めき、時には上に乗り、甘い声を漏らす姿を見るだけで十分だった。

わつちは姐さんのすべてを体に沁み込ませるため、毎日毎日姐さんを見続け、そして気がついた。

はじめてやってきたときに見た桃源郷は地獄だということを。

いくら着飾ろうと、男たちに愛されようと、しょせん遊女は商売道具でしかなかった。

休みなど数えるほどもなく、食事も粗末なものが出るだけ。

いいものを食べたければ、懸命に働いて客からお捻りをもらい、その金で自前の食べ物を買ったり、見世にあげた客に台の物をとらせご相伴にあずかるしかなかった。

この地獄のような場所を出るには『年明き』『身請け』『死』しか選択肢はなく、どれをとってもここを抜け出すにはまるで蜘蛛の糸を辿って天に昇るかのようなものだった。

それでもわっちは姐さんように男を買う女郎になりたかった。自分の親のように金で自分を売るのではなく、男の払う金で男を買う、そんな姐さんのような女郎になりたかった。

見世に出れば、光に集まる蛾のように姐さんに吸い寄せられる雄はとても滑稽で、甘い蜜も、巢も何一つ姐さんは与えていないのに、まるで自分が姐さんの一番かのように振舞う男たちはほんに可笑しかった。

そんな男たちをわっちと姐さんは陰で笑いあった。

男の前では滅多なことでは笑わない姐さんは、わっちという時は大きな口を開けて笑うし、優しく、そしてなにより温かく、柔らかだった。

『男の前では、傀儡でありなんし』

姐さんはいつもそう言っていた。笑うてもダメ、泣いてもダメ

ただ無であれと。

笑うのではない、嗤うのだ、

泣くのではない、啼くのだ、と。

男が求める仕草と表情と、手練手管を操り、男を惑わせると。

姐さんはまるで親のようにわっちの世話をやいてくれたものだった。といつても直接、諫言かんげんをくれたのは後にも先にもそれだけだったけれど。それでもわっちにとっては十分だったし、姐さんもわっちにはそれで十分だと分かっていたのだろう。

けれど、そんな姐さんもさすがに病を手練手管で操ることはできなかったようで、その時流行っていたコロリであっけなく死んでしまった。

あんなにも綺麗で優しくて温かい姐さんは、死ぬ前にはまるで干からびたにしめ牛蒡のように黒く、しわくちゃだった。

廓の誰もがあんなにも姐さんを持ち上げていたのに、コロリだと分かった途端に、皆姐さんを汚いものを見るかのように手で追い払った。

その時わっちは将来売れっ妓となることを約束された引込となって

いたから、遣り手に姐さんに近づくことを禁じられた。

皮肉だった。

わっちを育ててくれたのは姐さんなのに、その姐さんに会うことすら許されない。

けれどもわっちは暇があれば、人目を忍んで姐さんの所へと足を通わせた。

姐さんに近づくことは姐さんが許さなかったから、格子の隙間から覗くだけだったけれど。

姐さんは小屋と呼ぶにも粗末な部屋に閉じ込められ、昼夜苦しんで死んでいった。

三日前までは水の中を泳ぐ金魚のようにひらひらと廓を舞っていた姐さんは、まるで老婆のようになり果てて、死んだ。

それでもわっちにとって姐さんはこの世で美しいことに違いなかった。

死ぬ間際でも泣くことなく、恨みつらみ一つはかず、静かに息を引き取った姐さんは、とても気高く、美しかった。

『男の、前では、傀、儡、であり、なん、し』

掠れる声で囁いて、最期に残した言葉は、唯一わっちに諫言してくれたあの言葉だった。

『男、のまえでは、かい、らいで・・・、あ、りなん、し』  
『あい、・・・あい、姐さん、』

わっちの返事を聞いた姐さんは、最期に笑みを浮かべて息を引き取った。

その笑みはとても笑みと言えたものではなかったけれど、それでもわっちにとっては菩薩にも負けないくらいの優しい笑みだった。

橙色に光る灯りがぽおつと頬を照らし、遊女はハッと目の前で片肘をつく男を見た。

幸せそうに遊女の胸元を弄る姿があの日の男と重なる。

見目も形もすべて違うけれど、それでも根にあるものはあの男と同じだった。

あの日、姐さんの臍を押しつぶしていたあの醜い雄と。

そんな男を遊女は微笑を浮かべて見つめる。

ああ、姐さん。わっちはちゃんと傀儡になれているでありんすか。

姐さんのように気高い傀儡に、なれているでありんすか。

『まだまだ、なんしなあ・・・』

姐さんの笑う声が耳を掠めた。

「ふふ、あい、姐さん」

遊女は玉虫色の唇を襖に向けてニツと笑った。

「ん？どうかしたかい？」

「いいえ、なあんにもありません。さあ、旦那わつちに教えておくれなんし。この世の極楽を」

男は満足気に咽喉を鳴らし、遊女を組みしだく。

遊女は喘ぐ男の頭を下腹部に押しやり、ほんの少し開いた襖の向こうに人差し指をあてた唇の端を上げる。

あの時の簪は、今でもあの襖の向こうで小さな掌に包まれてぎらついている。

そして私は囁く。

『男の前では傀儡でありなんし』

## 第5話（後書き）

一話一話読み切りでの短編として考えていた作品なので、どうなったら完結とかはないのですが、今出来上がっているお話がここまです、書きたい時に思い付いたまま書きなぐるといった気まぐれ作品のため、いつ更新できるか分かりません。

一応、遊女の過去の的なものということでこれで完結とさせていただきますが、また思い付いたら載せていくので、その時にまた見ていただけると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7890p/>

---

夜に咲く華

2011年5月12日16時26分発行